

結社誌を訪ねて

安田 青葉

小さきは風に残して零余子採る

千葉 喬子

「繪硝子」一月号

零余子は自然薯や長芋などの葉の付け根に生ずる珠芽のことである。その零余子を採ろうとする時に、まだ育っていない小さなものは残しておこうとしている作者、自然を愛する優しい気持がよく表れている。「風に残して」の措辞にも、さやさやと吹く秋風の優しい景が見えてくる。千葉氏は「繪硝子」三十周年記念を期に主宰を継承されるという。この作品から、仲間が集い、育ち、さらに継続されてゆく未来が感じられるようである。創刊三十年を迎えられ、おめでとうございます。

合流し穏やかになる秋の河

高橋 将夫

「槐」一月号

山より下りて来る川は急流で、途中途中で合流を繰り返して、平地へ来てまた合流し太く穏やかな河となつてゆく。景が良く見え且つ平明な表現で詠まれていることに惹かれる。このような河を思うと、どうしても人生を重ねて読みたくなつてくる。川が生まれて、様々に採まれ、様々に和しながら、そして最後には広く穏やかな流れとなつてゆく。同時掲載の作品に、〈流れ行く先は浄土か秋の河〉も見られた。余裕のある作品群と思われた。

千歳を語る気根や枯公孫樹

古澤 宣友

「春嶺」一月号

「千歳」は千年、長い年月のことであり、「気根」は空気中に露出した根のことである。この作品では、気根が大公孫樹のこれまでの千年を物語っているという。今は枯れ尽くしている大公孫樹の姿が、あまりに大きく、又こつこつとした木肌の幹や瘤や気根に作者は気迫を感じたのだろう。このことにより、大公孫樹の春夏秋冬の様子、その辺りの町の様子までもが様々に想像されてくるのである。創刊八百号を迎えられ、おめでとうございます。

鷹渡る空の抵抗無きごとく

石井いさお

「煌星」一月号

鷹が越冬のために北方から日本に渡ってくる時の様子であろう。その際、鷹は翼と尾羽を広げて上昇気流を捕まえて、高度を上げる。十分に上がってから滑空をする。このことを繰り返しながら進むので、条件が揃えば羽ばたくことなく省エネで長距離を行くことが出来るという。「空の抵抗無きごとく」の直喩は、優雅そうに見えるだけであつて、実際は過酷な抵抗を、鷹は本能的に乗り切っているであろう。そのような鷹に心酔している作者の様子が見えてくるようである。

櫛の実 櫛の袴 掃き固め

山西 雅子

「舞」新年特別号

櫛の実が球形をしていて、大きなものは二センチほどにもなる。近隣のお屋敷に区の貴重木になっている櫛の大木がある。その実が道路にはみ出し沢山落ちていたりする。高いところから落ちたせいもあるのか、丸い実から袴が外れているものが多く見られる。そして掃き寄せてあるものの、少しでも広がらないようにと、まさに「掃き固め」であるのである。あまりにもこの作品の通りなので感心してしまった。よく見ていないとできない表現ではない

だろうか。

星と星結びて我の聖樹とす

白濱 一羊

「樹氷」一月号

星の配置を様々な形に見立てて天球を区分しているのが星座である。星座には、神話に登場する人物や動物、器物に見立てて名前がついている。不思議なことに、木や花の名前がつけられたものがないように思うのだが。作者は夜空を仰いで自分の好きなように星々を結んでみた。そして出来上がったのが聖樹だったのである。この作品には、ロマンがあり祈りがあり、何か誓いを交わしているような思いが窺える。

悪霊の憑きたるかたち菱の実は

陽 美保子

「泉」一月号

水草の菱は葉も実も菱形である。根は泥中にあるが葉は水面に浮き、夏の開花後、秋に鋭い角状の突起のある固い実をつける。この菱の実のことは知っているつもりでいたが改めて調べてみると本当に黒くて怖そうで、まさに「悪霊の憑きたるかたち」をしているのである。そして何か見たことのあるものに似ていると思った。撒菱である。忍者が追手から逃れるために撒く武器、撒菱は木や鉄から作られている。しかし、そもそもはこの菱の実であったというので納得ができた。比喩が決まっただけで、断定しているところに面白みがある。

戦争の記事に林檎の皮落とす

森 高幸

「群星」冬号

今現在の話であろう。そもそも戦争などがなければ戦争の記事もないであろうに、作者の眼前には戦争を伝える記事が載っている新聞が広がっている。ロシア・ウクライナ戦争か、イスラエル・

パレスチナ紛争か、スーダン内戦かと。一方、林檎を食べようと皮を剥いている作者がいる。その剥いた皮を新聞に落とした、そのことのみを言っているだけなのである。戦争と林檎の皮とのギャップの大きさに平和を願う思いが見え隠れしている。時事俳句はこのようにものを見せるだけで、あとは読者の読みに任せれば良いのだろうか。

雲海の見渡せるところに立っている

乗田眞紀子

「山火」一月号

作者は雲海の見渡せるところに立っている。雲海は夜から早朝にかけては表面がなめらかだが、日中は上昇気流のため荒く波立つという。この作品では、その雲海が崩れて待望の八ヶ岳が顔を出してくれたのではないだろうか。中七の「怒濤と」の措辞に、雲海が荒れ狂う大波のように崩れたことが窺える。そして「ドトウ」と大きな音までもが響いたようにも感じて取れた。写生に基づいた迫力のある骨太な作品となっている。

昼顔は昼顔荒野であらうとも

大高 翔

「藍花」冬号

昼顔は山野に自生し、道端などでも見かける。朝顔に似た小形で淡紅色をしていて昼開いて夕刻にしほむ可憐な花である。また、地下茎を伸ばして広がっていたり、地上の茎は蔓になってあちこちに絡みつくような生命力のある花でもある。この作品の「昼顔は昼顔」の措辞は「自分は自分」と言うことではないか。「どのようなところでも大丈夫」と自らを鼓舞している作者の意志のようなのが見取れる。作者にとって、この字余りも句またがりも作品をゆるぎないものにしていてと思えるのである。

（筆者住所〒165-0035 中野区白鷺三五一―一六―四〇三）